

聖書：マタイ 4：12～17

説教題：偉大な光

日時：2016年11月20日（朝拝）

今、私たちはこの福音書の最初の方を見ていて、イエス様がヨハネから洗礼を受けたこと、また荒野で悪魔の誘惑を受けて勝利したことを見ました。これらのことを経てイエス様はメシヤとしてふさわしい方であることが証明され、いよいよ公の生涯へと入る準備が整ったわけです。そして今日の箇所にはバプテスマのヨハネが捕らえられたことが記されています。イエス様はこれを聞いてガリラヤへと立ち退かれました。これはどういふことでしょうか。イエス様はヨハネ逮捕のニュースを聞いて恐れをなし、逃げて行ったのでしょうか。そうだとしたら、イエス様はヨハネよりも勇気がない人になってしまいます。ヨハネが捕らえられた経緯については、後の14章に回想という形で記されます。ヨハネは国主ヘロデが兄弟ピリポの妻ヘロデヤを自分の妻とし、先に結婚していた妻を追い返したことを責めたのです。ヨハネはご存知のように、悔い改めを迫る説教者で、たとえ相手が王であろうと、はっきりそのメッセージを伝えました。そんなヨハネに比べてイエス様は臆病だったのでしょうか。決してそうではないでしょう。イエス様がいかに敢然とユダヤの指導者たちと戦い、また恐るべき十字架への道にも進んで行かれたかを私たちはこの福音書にも見ます。イエス様こそ最も力強い戦いの歩みをされた方です。そして考えに入れるべきは、イエス様が立ち退かれたガリラヤも当時、国主ヘロデの支配下にあったということです。ですからこの「ヨハネ逮捕」と「イエス様のガリラヤ行き」との間にはもっと違う関連を見るべきだと思います。それはこういうことだと思われまふ。すなわちヨハネの逮捕は彼のメシヤの先駆者としての働きが終了したことを意味する。イエス様はこのニュースに接してご自身の時が来たことを知られたのです。そしてご自身の働きを公にスタートするために積極的な目的のもとにガリラヤへと赴かれたのです。

それにしてもなぜイエス様はガリラヤへと立ち退かれたのでしょうか。それは14節に、イザヤの預言が成就するためであったと書いてあります。「これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、『ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。』」ここ

に「ガリラヤ」という地方の特徴、またこの場所が選ばれたことの意義が記されています。ご存知のようにガリラヤは首都エルサレムがある南のユダヤ地方に比べてずっと北方のガリラヤ湖北西部にあります。中央から見れば田舎の地であり、辺境の地です。そして歴史的には紀元前8世紀にアッシリヤ帝国による捕囚の憂き目に遭い、この地は植民地として外国人が住むところとなりました。その結果、この地域には異邦人が混じり、エルサレムを中心とする南のユダヤ地方からは「異邦人のガリラヤ」と呼ばれて軽蔑されていました。ですから聖書の中にも、「まさかキリストはガリラヤからは出ないだろう。」とか「あなたもガリラヤの出身なのか。調べてみなさい。ガリラヤから預言者は起こらない。」などといった人々の言葉が記されています。そしてこのような経緯から想像できるように、そこには様々な異教の習慣、偶像礼拝の影響もありました。そういう意味でここはエルサレムから見たら霊的な暗黒の地でした。そこにいるのは神から遠く離れ、神の光を失い、暗やみの中にある民、死の地と死の陰にすわっていた人々だったのです。

しかしそのような暗黒の地に、神の光は注がれることが旧約聖書で預言されていました。預言者イザヤはアッシリヤの侵略によって悲惨と絶望にあえいでいた人々に、神がやがて偉大な光を見せて下さること、そしてあなたがたを照らし出して下さるということを語りました。その預言がこのイエス様において成就したとマタイは言っているわけです。普通、私たちの考えから言うなら、福音はまずイスラエルの宗教の中心地エルサレムから発信されると考えるのではないのでしょうか。ガリラヤなどは本来見向きもされない地方です。彼らを覆っていた霊的暗黒は彼らの罪と無関係ではありません。彼らの先祖は主の警告に聞かず、主にそむき続けたために、ついにはアッシリヤに捕囚されたのです。そしてその傷をこの時も深く負っていました。「異邦人のガリラヤ」と呼ばれて、神の民としてのアイデンティティーまで失いそうな状態にありました。確かにその地は死の地であり、そこに住む人々は死の陰に座している人々でした。希望を持たず、落胆し、ガッカリし、失意の中にある人々。ただ暗やみに座って意気消沈し、あとは死が待っているだけという人々。しかしそういう絶望の深い所にも福音の光は届くということです。その彼らに偉大な光が上るのです。神がそのことをされるのです。この預言に従ってイエス様がまずガリラヤへと赴かれたことは、いかにこの福音は「恵み」で特徴付けられるものであり、またどんな人にも希望を与え得るものであるかが示されていることでしょうか。

私たちも暗やみの中に座っているような者かもしれません。人生の様々な問題に囲まれて意気消沈し、深い落胆と失意の中にあるかもしれません。そしてそうなったのはガリラヤの人々と同様、自業自得によることかもしれません。もはや自分のいる場所は死の地のようなかもしれません。明るい将来が描けないかもしれません。しかし神はそこにも光を照らして下さるのです。それは弱い光ではなく「偉大な光」と表現されている光です。それは私たちの人生に明るい見通しを与える光であり、命と力を与えてくれる光です。これまでどんなに神から離れ、また人々からも軽蔑され、暗きに落ち込んでいたとしても、神はこの光を照らして、私たちが喜びを持って立ち上がることができるようにして下さい。この私の上にも太陽が上るようにして下さい。

ではどのようにして私たちはこの素晴らしい祝福にあずかることができるのでしょうか。そのことが17節のイエス様の福音宣教における第一声に示されています。「この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。』 私たちはこのイエス様の宣教における最初の言葉を良く心に留めるべきだと思います。イエス様は「罪がある人は悔い改めなさい」とか「悪いことをしたと思う人は悔い改めなさい」などという言い方をしていません。条件はつけず、すべての人に対して、「悔い改めなさい」と言われました。このことは全人類が、一人の例外もなく、その生き方において間違いがあるということを意味します。それをまず改めるのでなければ何も問題は解決しない。私たちは現実の生活の中で様々な問題を抱えています。家族関係、人間関係、健康の問題、仕事の問題、経済的な問題、また将来に関すること・・・。しかし実はそれらが一番の問題ではないのです。それよりも私にとってもっと根本的で重大な問題がある。それは神との関係です。なぜ私たちは苦しみにあえいでいるのか。なぜ死の陰に座しているのか。それは一言で言えば神から離れた生活をしているからでしょう。神を無視し、自分中心の誤った生活をしているからでしょう。聖書は私たち人間を造ったのは神だと言っています。従って私たちの命は神に由来しています。その命の源なる神と正しい関係にないなら、私たちに生き生きとした命が見られず、また光もなく、死の陰に座して意気消沈しているというのは当然のことではないでしょうか。ですから私たちには神に立ち返る「悔い改め」が他の何にも先んじて必要になるのです。

そしてこのメッセージをより緊急なものにしているのが、次の「天の御国が近づいた

から」という言葉です。ここから教えられることは、今の世はいつまでも続くものではないということです。天の御国は神の支配がきちんに行なわれる世界のことです。神は罪と悪が幅を利かせている今の世界をいつまでも放置されることはしません。時を定めて、その日には、ご自身の義をはっきりと現わし、すべてを清算されます。イエス様はその最後の日が近づいた！と言っておられます。この「近づいた」と訳されている言葉の意味は、すでに現在にのしかかって来ているという意味です。この言葉に真剣に受け止めるなら、私たちは今までの自己満足の生活を続けていることはできないと思います。すべてを見通し、正しくさばかれる神の前に立たされて、私は大丈夫でしょうか。神が間もなく実現される天の御国に入れてもらえるでしょうか。私たちはその日を見据えて、自分の生活のあり方を根本的に点検し、神に方向転換して、その日に備える歩みを急いで始めなければならないのではないのでしょうか。

しかし「悔い改めなさい」というメッセージは、単に自分の力で自分の生活を改め、天の御国にふさわしいものにして行くということではありません。聖書の様々な箇所を通して私たちが知らされていることは、悔い改めは神の恵みを豊かに受けるための通路であるということです。私たちが神の御前で正直に自分を振り返り、その罪を認め、悲しんで告白する時、神は決してその私たちが軽んじられません。詩篇 51 篇 17 節：「神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」 詩篇 34 篇 18 節：「主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、霊の砕かれた者を救われる。」 マタイの福音書 5 章 3 節：「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」 神は心をかたくなにして、自分はこれで正しいのだ、何も間違っていないのだと自己弁護する者には、何のあわれみも垂れない。しかし私たちが自分を振り返り、みじめな自分をそのまま認めてあわれみを請う時、そういう者を軽んじず、むしろ恵みを豊かに施して下さるのです。

神はそのためのみわざをここでしておられます。イエス様はここで「天の御国が近づいた」と言われましたが、「近い」と断言できる根拠は何でしょうか。それはイエス様がついに地上に来たということです。イエス様が地上に来た目的は何でしょう。イエス様は 16 節に記されていたように、恵みをもたらす約束のメシヤとして来られました。暗やみの中に座して希望のなかった者たちに光を照らすために来られました。16 節の「偉大な光」とはメシヤの光のことです。イエス様は自分で自分を救えない私たちに、

救いをもたらすために来たのです。ただその祝福にあずかるには、「悔い改め」という道を通らなければならないことが言われているのです。イエス様はこれからの生涯を通して、特に十字架に至る生涯を通して、私たちの罪が赦されるためのわざを成し遂げてくださいます。そしてご自身を信じる者を神との正しい関係に回復し、神の光の中にある者としてくださいます。そしてさらに私たちがその光の中を益々喜びを持って歩み続けるための恵みと力を注いでくださいます。そうして最終的に完成する天の御国に入る者とさせてくださるのです。

私たちはこの偉大な光を知り、この光に照らされ、またその光を内に頂いて歩んでいるでしょうか。もしこの光を持たないまま今の生活を続けるなら、それは大変危険です。イエス様はこの公の生涯の初めの時に「天の御国が近づいた」と言われました。であるなら、すでにイエス様の地上の生涯が成し遂げられ、復活し、天に上げられ、聖霊が遣わされた今の時代は限りなく終わりに近いと言わなければなりません。あと世界の歴史において残されている神のプログラムは主の再臨だけです。もはやそれはいつ起こってもおかしくありません。そういう意味で私たちはまさに最後の最後のギリギリの所にいるというのが聖書の主張です。私たちは間もなく訪れる日のための準備ができていますでしょうか。もし自分を振り返って、自分はこの光を持っていないと思うなら、私たちは神が招いている悔い改めの道へと進めば良いのです。一切をご存知である神の前で、自分が罪の内に生きて来たことを認め、悲しみ、神がついに遣わしてくださったメシヤに信頼し、この方に従う新しい生活へと踏み出して行く。そうするなら、その人には偉大な光が上ると言われています。たとえこれまで暗やみと死の地に座っていた人々であっても、光の中を歩み続ける生活へと導かれます。イエス様はヨハネの福音書 8 章 12 節でこう言われました。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」 その光の中で、やがて完成する天の御国にそのままつながって行く祝福の歩みへと導かれることになるのです。